

河川の区分

河口部：汽水域となる球磨川堰から下流（球磨川本川）、新前川堰から下流（前川）、八の字堰から下流（南川）の区間
 下流部：球磨川堰から遙拝堰までの平野部を流下する区間
 中流部：遙拝堰から渡地区までの山間部を流下する区間
 上流部：渡地区から市房ダムまでの人吉球磨盆地を流下する区間
 川辺川：球磨川合流点から^{かみやしき}神屋敷堰までの人吉球磨盆地及び山間部を流下する区間

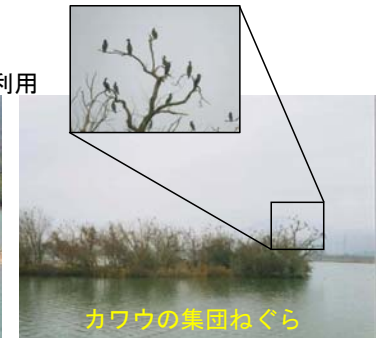
河口部

○河口は、干満の差が大きい八代海に面しており、広大な干潟を形成。
 シギ・チドリ等の渡り鳥の中継地点となっている。
 ○河口より分流堰の間は汽水域でヨシ群落が分布



下流部

○分流堰により湛水域を形成
 ○中洲にはヤナギなどが生育し、冬場にはカワウ等がねぐらに利用



中流部

○山間部を貫流し、岩河床に砂礫が堆積し、瀬・淵が連続する区間が存在。一方、堰やダムによる湛水域が存在
 ○河畔にはエノキ、アラカシ等の高木林が分布



上流部・支川川辺川

○瀬や淵、砂州、ワンドが数多く分布
 ○本川上流の湿地にはヤナギなどが生育
 ○多くの取水堰が存在



河川の区分と自然環境

河川の区分毎の環境

区分	河口部	下流部	中流部	上流部	支川川辺川
区 間	河口～分流堰	分流堰～遙拝堰	遙拝堰～渡地点	渡地点～市房ダム	合流点～神屋敷堰
地 形	平地		山間狭窄部	盆地	盆地・山間狭窄部
特 性	汽水域、干潟	緩流域	瀬、淵、岩河床、湛水域	瀬、淵、ワンド	瀬、淵
河床材料	シルト、砂、砂利主体		砂利、転石主体		転石主体
勾 配	1/1,000～LEVEL	1/1,700程度	1/300～1/1,000	1/200～1/600	1/150～1/300
植物相	ヨシ群落 アイシ等の塩沼植生	ヨシ群落 ヤギ林	マダケ林 ムクキエナキ等の広葉樹林	ツルヨシ群落 ヤギ林	ツルヨシ群落 マダケ群落
生物相	ボウ、ハゼ類 シギ、チドリ シマササギ等	アユ、カワムツ、カマツカ カワ、サギ類 アカネズミ、イナ	アユ、オカワ、カワムツ ヒヨドリ、サギ類 カヤネズミ	アユ、オカワ、カワムツ、ギンブナ、 タナゴ セキレイ類、ヒヨドリ、サギ類 ゲンゴロウ類、コムラサキ	アユ、オカワ、ウグイ、カマツカ、カ ムツ、ヤマメ ヤマセミ、カワガラス、セキレイ タヌキ、テン、カハヒ

環境調査結果の整理（注目種の選定）

環境調査結果を基に、球磨川を特徴づける生態系について上位性、典型性、特殊性、移動性の視点で、注目種を選定。

上位性	高次の捕食者である猛禽類や肉食性の鳥類、雑食性の哺乳類のうち広域に渡って多く確認されている種を選定
典型性	球磨川の環境区分に依存している種のうち、広域に渡って多く確認されている種を選定
特殊性	特殊な生息・生育環境に依存する種を検討したが、球磨川では該当が無かった。
移動性	水域の河川と海域を行き来する回遊性の魚介類、陸域の広い行動圏をもつ哺乳類のうち、多く確認されている種を選定

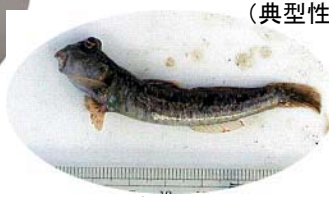
視点	環境区分	魚類	底生動物	鳥類	両・爬・哺	陸上昆虫類等	
上位性				サギ類、カワセミ			
典型性	陸域	砂礫地		セグロセキレイ		ツマグロキチョウ	
		水際植生		カイツブリ			
		高水敷植生		セッカ	カヤネズミ	イチモンジセセリ	
		ヤナギ林		サギ類		コムラサキ	
		高木林		ヒヨドリ、サギ類	タヌキ		
典型性	汽水域	水域	マハゼ				
		河口干潟	トビハゼ	ケフサイソガニ	シギ、チドリ		
	水域	淡水域	水域		サギ類		
			瀬	アユ	アカマダラカゲロウ		
			淵	カワムツ			
			ワンド・よどみ	ギンブナ	ミナミヌマエビ、 ハグロトンボ	カモ類	ヌマガエル
溪流		サワガニ					
特殊性							
移動性		アユ			タヌキ		



カワセミ（上位性）



ツマグロキチョウ
（典型性<陸域>）



トビハゼ
（典型性<水域>）



アユ（移動性）

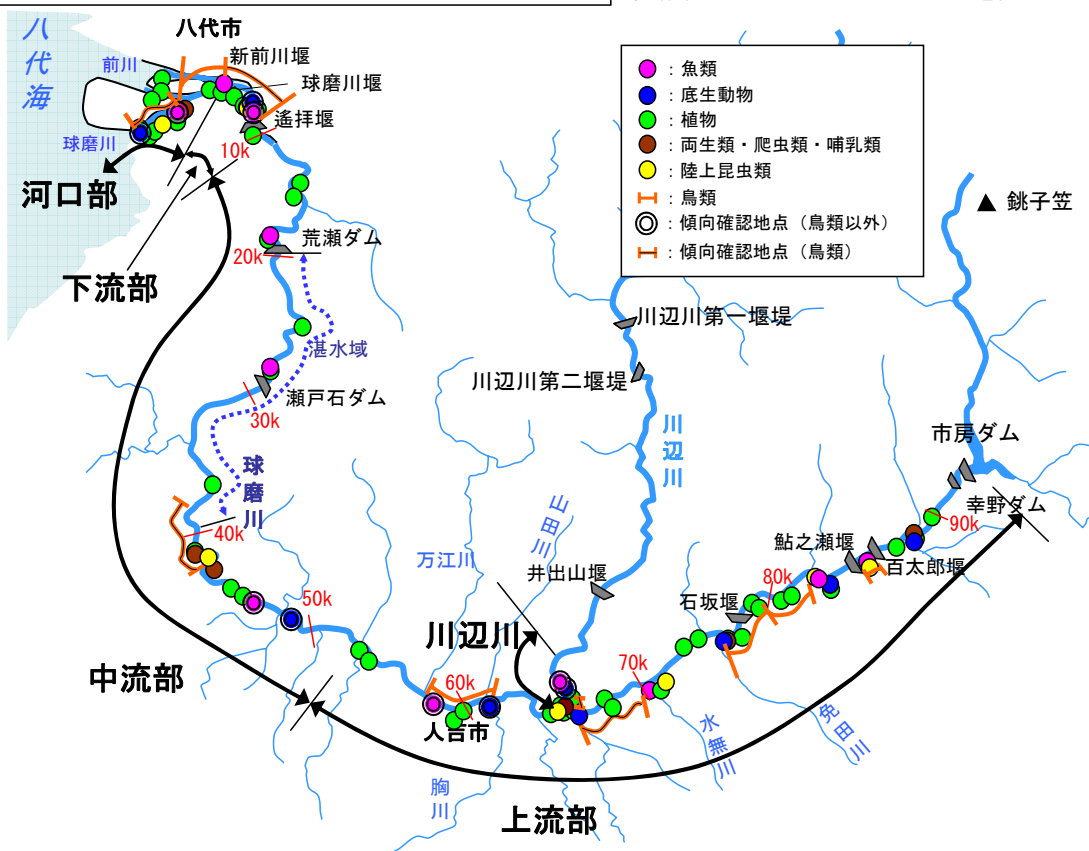
調査で確認された希少種及び調査結果より選定した注目種などに配慮し、河川の整備と保全を図る。2

河川水辺の国勢調査の概要

○全国の一級水系では、河川を“環境”という観点からとらえた基礎情報の収集及び整備のために平成2年より河川水辺の国勢調査を実施し広く公表。
○球磨川水系でも直轄管理区間内においてその特徴を把握するため、河川区分毎に代表的な地点を選定し、生物・河川調査を実施。

生物に関する調査地点（平成13年～平成17年）

直轄管理区間（川辺川ダム区間を除く）



球磨川の河川区分毎の環境（直轄管理区間）

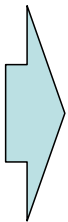
区分	河口部	下流部	中流部	上流部	支川川辺川	
区間	河口～分流堰	分流堰～遙拝堰	遙拝堰～渡地点	渡地点～市房ダム	合流点～柳瀬橋	
地形	平地		山間狭窄部	盆地		
特性	汽水域、干潟	緩流域	瀬、淵、岩河床	瀬、淵、ワンド	瀬、淵	
河床材料	シルト、砂、砂利主体			砂利、転石主体		
勾配	1/1,000～LEVEL	1/1,700程度	1/300～1/1,000	1/200～1/600	1/300	
生物相	植物	シ群落 アイシ等の塩沼植生	シ群落 オハヤシギ群落 アサメノヒ群落	マダケ群落 ムクギ-エノキ等の広葉樹林	オギ群落 ツルシ群落 オハヤシギ群落	ツルシ群落 オハヤシギ群落
	動物	ボウ、ハゼ類 シギ・チドリ類 ソマキ	アユ、オイカワ、カワムツ、カマツカ サギ類、ウミコ アカネミ、イサ	アユ、オイカワ、カマツカ サギ類、セキレイ類 カヤネミ	アユ、オイカワ、ウグイ、カワムツ、タナゴ セキレイ類、ツバメ、サギ類 ゲンゴロウ類、コムサギ	アユ、オイカワ、ウグイ、カマツカ、カワムツ スズメ、セキレイ類、サギ類

調査結果の公表

○河川水辺の国勢調査の結果は、毎年とりまとめを行い記者発表を実施している。また、国土交通省ホームページでも常時公表している。

水辺の国勢調査（利用調査を除く）の実施状況

調査の区分	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17
生物調査	魚介類	●				●			●						●	
	底生動物				●				●					●		
	鳥類		●					●				●				
	両生類				●				●				●	●		
	爬虫類				●				●				●	●		
	哺乳類				●				●				●	●		
	陸上昆虫類等					●					●					●
	植物			●					●			●				
河川調査		●	●	●			●				●		●			

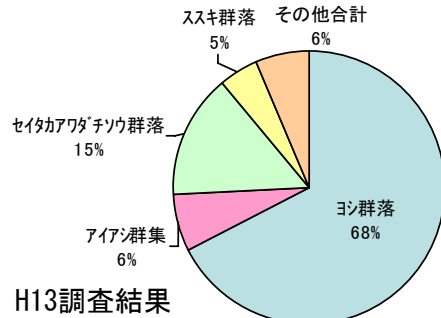
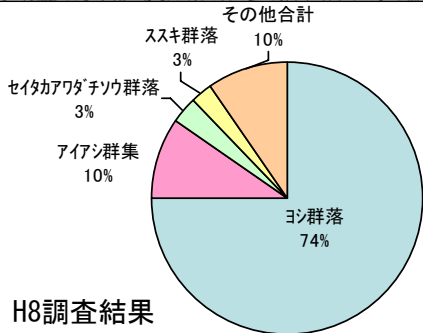
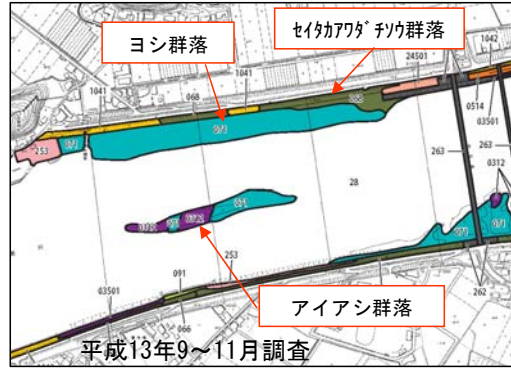
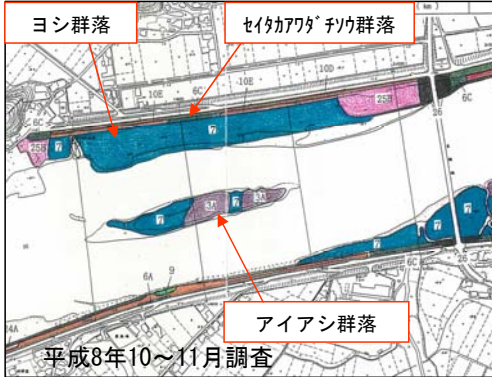


河川水辺の国勢調査の結果について（河口部）

植物群落の変化

河口部は、平成8年、平成13年ともにヨシ群落为主要な群落となっている。また、外来種のセイタカアワダチソウ群落が増加傾向にある。

○河口部（1.0km～2.0km）の植生



鳥類相の変化

河口干潟を移動の中継地もしくは越冬地として利用するハマシギ、ヒドリカモなど主にシギ・チドリ類やカモ類が確認されている。

※球磨川河口域の干潟は、渡り鳥の越冬地として利用されていることから、越冬期の調査結果を比較。

順位	河口部（調査地点：0.0～3.0k）	
	H8年1月	H13年1月
1	ハマシギ	ヒドリガモ
2	ヒドリガモ	ユリカモメ
3	シロチドリ	マガモ
4	カワラヒワ	ハマシギ
5	コガモ	ダイゼン

※H6、H13の2ヶ年とも上位に確認された種：

魚類相の変化

汽水環境に生息するボラ、ハゼ類が多く確認されており、その傾向は大きく変化していない。

※魚類の行動が活発になる夏季～秋季の結果を比較

	河口部（調査地点：2.5～3.1k）		
	H6年8月	H10年10月	H16年9月
1	マハゼ	セスジボラ	マハゼ
2	セスジボラ	マハゼ	ボラ
3	コノシロ	コノシロ	トビハゼ
4	ヒイラギ	ヒイラギ	ウロハゼ
5	スズキ	ウロハゼ	セスジボラ

※H6、H11、H16の3ヶ年とも上位に確認された種：

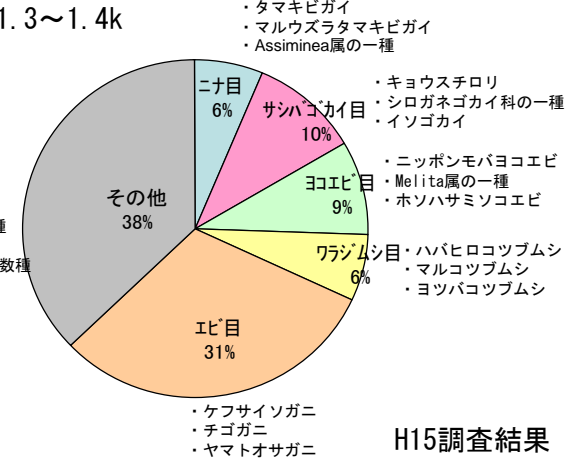
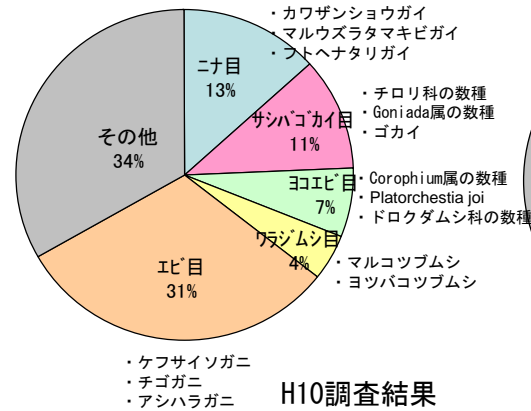
※H6、H11、H16のうち2ヶ年で上位に確認された種：

※青字：汽水・海水魚、赤字：回遊魚、黒字：淡水魚

底生動物の変化

底生動物は汽水環境を好むエビ目、ニナ目、サシバゴカイ目などの種が多く確認されており、その傾向は大きく変化していない。

調査地点：1.3～1.4k



※底生動物は、出現する種が季節により大きく異なるため、通年での結果を比較

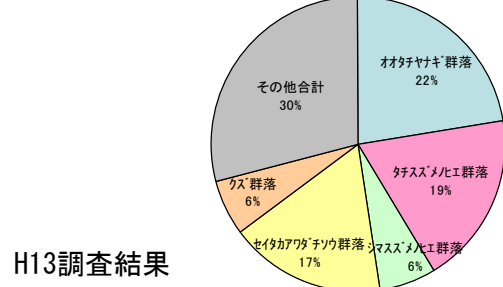
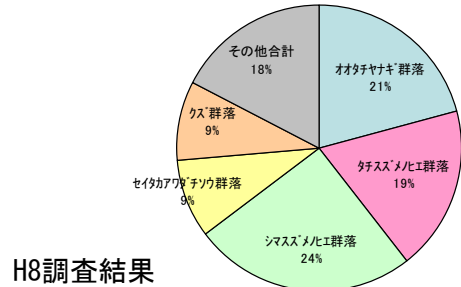
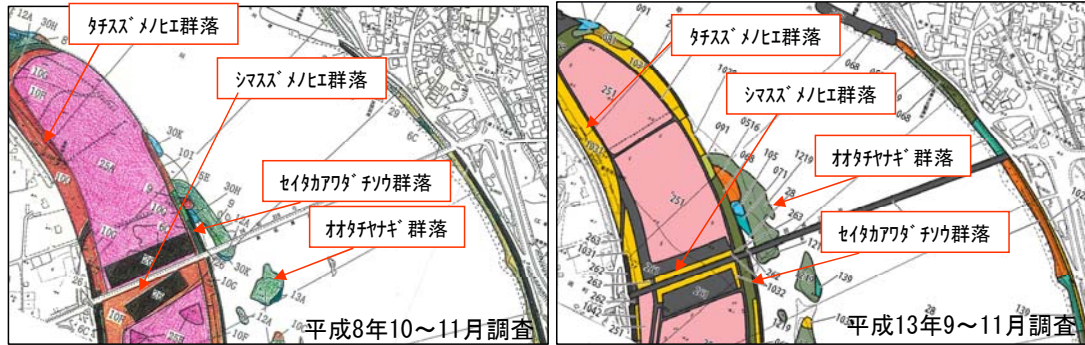
植物群落及び生物の確認種に大きな変化はなく、河口部の典型的な環境に大きな変化は見られない。

河川水辺の国勢調査の結果について（下流部）

植物群落の変化

下流部は、高水敷に運動公園が整備されており、生物の生息・生育環境としては、水際部が重要である。その重要な水際部の植生は、平成8年、平成13年ともにオオチヤナギ群落为主要な群落となっている。高水敷では、外来種であるシマスズメノヒエ群落が増加している。

○下流部（6km～7km）の植生



鳥類相の変化

汽水域が近く、ウミネコが多く確認されている。また、サギ類についても多く確認されている。

※行動が活発になる夏季の調査結果を比較。

順位	下流部（調査地点：6.0～9.0k）	
	H8年7月	H13年7月
1	ウミネコ	ウミネコ
2	スズメ	スズメ
3	ゴイサギ	ツバメ
4	コサギ	アオサギ
5	ダイサギ	コサギ

※H6、H13の2ヶ年とも上位に確認された種：■

魚類相の変化

確認個体の多い種に若干変動があるが、オイカワなどが多く確認されており、その傾向は大きく変化していない。

※魚類の行動が活発になる夏季～秋季の結果を比較

	下流部（調査地点：8.5～8.9k）		
	H6年8月	H10年10月	H16年9月
1	アユ	オイカワ	オイカワ
2	オイカワ	ウグイ	スゴモロコ
3	ヌマチチブ	カマツカ	カワムツ
4	ウグイ	ヌマチチブ	ギギ
5	シマヨシノボリ	スゴモロコ	イトモロコ

※H6、H11、H16の3ヶ年とも上位に確認された種：■

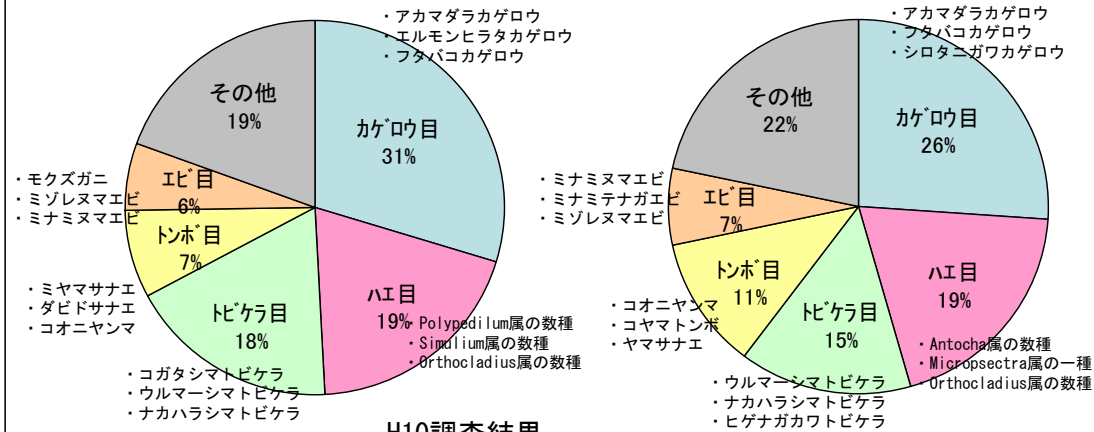
※H6、H11、H16のうち2ヶ年で上位に確認された種：■

※青字：汽水・海水魚、赤字：回遊魚、黒字：淡水魚

底生動物の変化

カゲロウ目、ハエ目、トビケラ目の種が多く確認されており、その傾向は大きく変化していない。

調査地点：8.6～9.0k



※底生動物は、出現する種が季節により大きく異なるため、通年での結果を比較

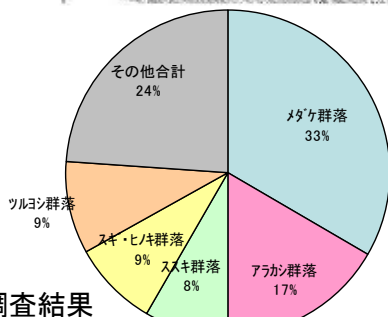
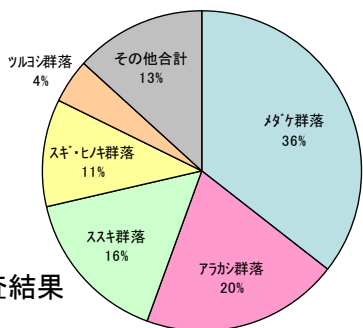
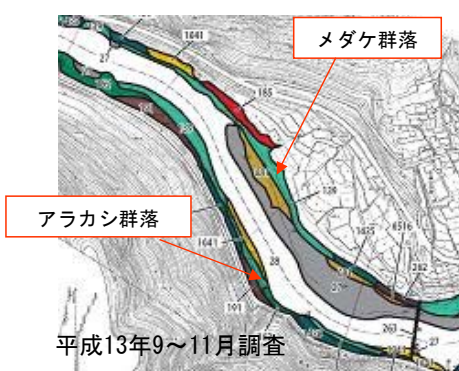
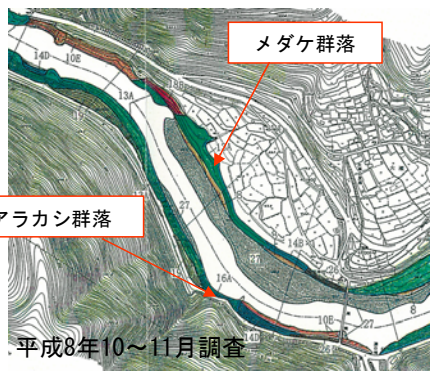
植物群落及び生物の確認種に大きな変化はなく、下流部の典型的な環境に大きな変化は見られない。

河川水辺の国勢調査の結果について（中流部）

植物群落の変化

中流部は、平成8年、平成13年ともにメダケ、アラカシ群落为主要な群落となっている。

○中流部（40.0km～41.0km）の植生



鳥類相の変化

サギ類やセグロセキレイのほか、メジロなどの林地の鳥が多く確認されている。

※行動が活発になる夏季の調査結果を比較。

順位	中流部（調査地点：38.8～41.8k）	
	H8年7月	H13年7月
1	ササゴイ	メジロ
2	ヒヨドリ	アマツバメ
3	メジロ	セグロセキレイ
4	セグロセキレイ	ササゴイ
5	コサギ	アオサギ

※H6、H13の2ヶ年とも上位に確認された種：■

魚類相の変化

確認個体の多い種はオイカワ、カワムツ、カマツカ、ウグイなどのコイ科の魚類となっており、その傾向は大きく変化していない。

※魚類の行動が活発になる夏季～秋季の結果を比較

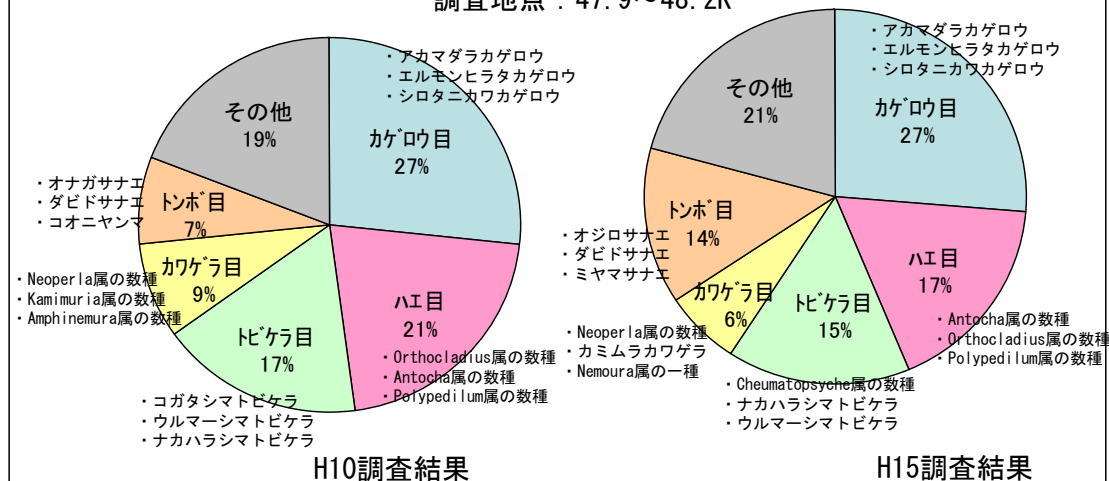
	中流部（調査地点：45.7～46.2k）		
	H6年8月	H10年10月	H16年9月
1	ウグイ	オイカワ	カワムツ
2	カマツカ	カマツカ	オイカワ
3	オイカワ	ウグイ	ウグイ
4	イトモロコ	カワムツ	カマツカ
5	ニゴイ	ドンコ	イトモロコ

※H6, H11, H16の3ヶ年とも上位に確認された種：■
 ※H6, H11, H16のうち2ヶ年で上位に確認された種：■
 ※青字：汽水・海水魚、赤字：回遊魚、黒字：淡水魚

底生動物の変化

カゲロウ目、ハエ目、トビケラ目の種が多く確認されており、その傾向は大きく変化していない。

調査地点：47.9～48.2k



※底生動物は、出現する種が季節により大きく異なるため、通年での結果を比較

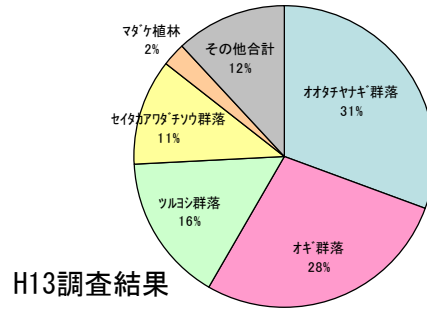
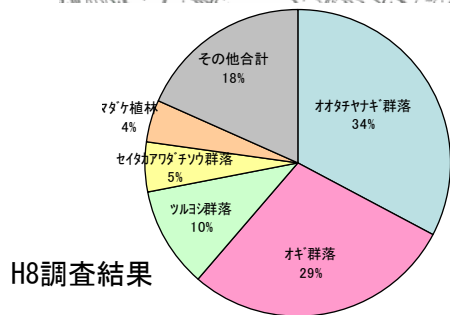
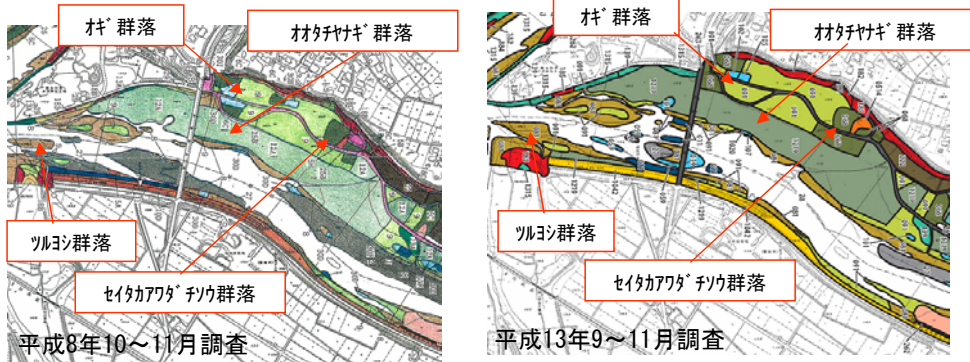
植物群落及び生物の確認種に大きな変化はなく、中流部の典型的な環境に大きな変化は見られない。

河川水辺の国勢調査の結果について（上流部）

植物群落の変化

上流部は、平成8年、平成13年ともにオオタチヤナギ群落、オギ群落、ツルヨシ群落が主要な群落となっている。また、外来種のセイタカアワダチソウ群落が増加傾向にある。

○上流部（67km～68km）の植生



鳥類相の変化

サギ類が多く確認される傾向となっている。また、ヒバリやセッカなどの草食性の鳥も確認されている。

※行動が活発になる夏季の調査結果を比較。

順位	上流部（調査地点：66.6～69.6k）	
	H8年7月	H13年7月
1	ムクドリ	ゴイサギ
2	スズメ	コサギ
3	コサギ	ヒバリ
4	セグロセキレイ	ツバメ
5	ツバメ	セッカ

※H6、H13の2ヶ年とも上位に確認された種：■

魚類相の変化

確認個体の多い種はオイカワ、ウグイ、カワムツなどのコイ科の魚類となっており、その傾向は大きく変化していない。

※魚類の行動が活発になる夏季～秋季の結果を比較

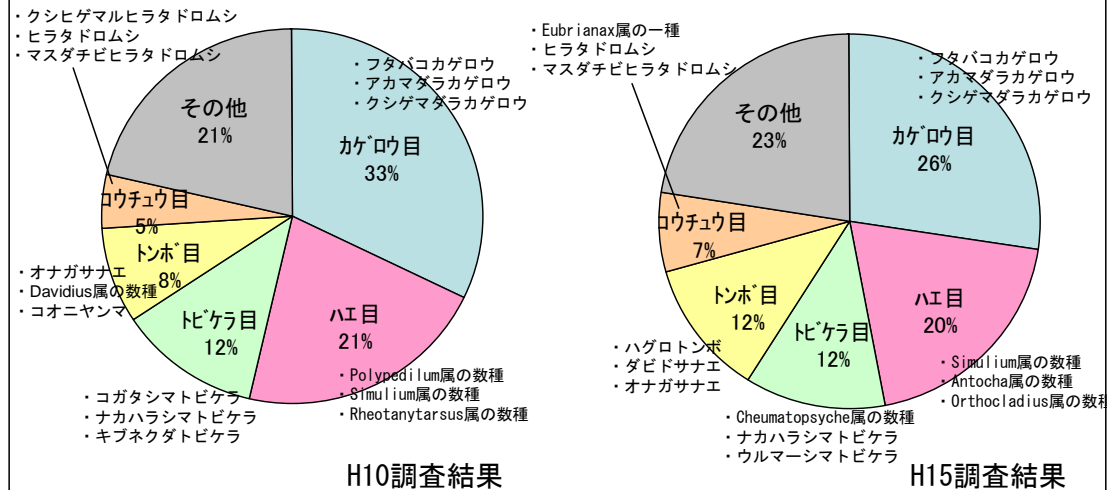
	上流部（調査地点：56.0～56.5k）		
	H6年8月	H10年10月	H16年9月
1	ウグイ	オイカワ	オイカワ
2	カマツカ	ウグイ	ウグイ
3	オイカワ	カワムツ	ドンコ
4	ドンコ	ギンブナ	カワムツ
5	アユ	カマツカ	ギンブナ

※H6, H11, H16の3ヶ年とも上位に確認された種：■
 ※H6, H11, H16のうち2ヶ年で上位に確認された種：■
 ※青字：汽水・海水魚、赤字：回遊魚、黒字：淡水魚

底生動物の変化

カゲロウ目、ハエ目、トビケラ目の種が多く確認されており、その傾向は大きく変化していない。

調査地点：61.0～61.2K



※底生動物は、出現する種が季節により大きく異なるため、通年での結果を比較

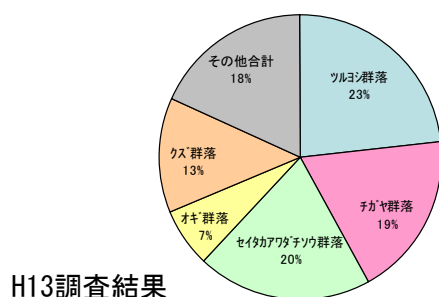
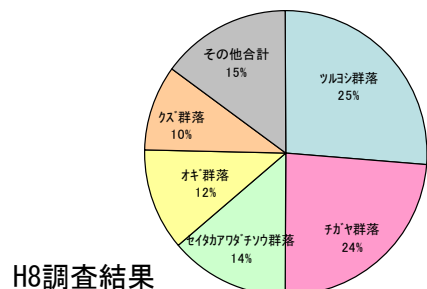
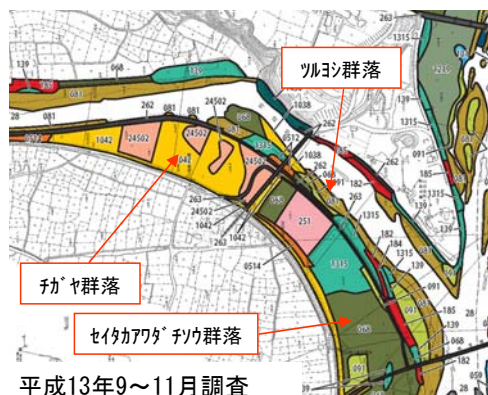
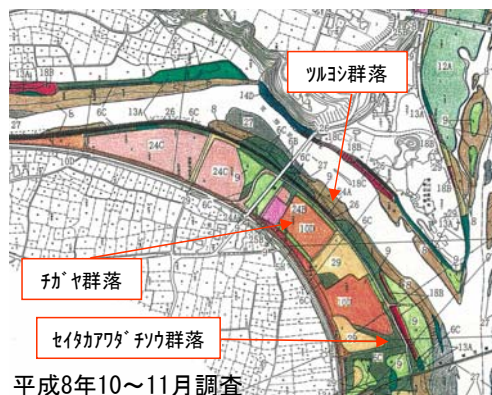
植物群落及び生物の確認種に大きな変化はなく、上流部の典型的な環境に大きな変化は見られない。

河川水辺の国勢調査の結果について（川辺川）

植物群落の変化

川辺川は、平成8年、平成13年ともにツルヨシ群落、チガヤ群落が主要な群落となっている。また、外来種のセイタカアワダチソウ群落が増加傾向にある。

○川辺川（0km～1km）の植生



鳥類相の変化

周辺に田園が多いこともあり、スズメが多く確認されている。また、セキレイ、サギ類も多く確認されている。

※行動が活発になる夏季の調査結果を比較。

順位	川辺川（調査地点：0.4～0.6k）	
	H8年7月	H13年7月
1	スズメ	スズメ
2	セグロセキレイ	ダイサギ
3	ササゴイ	セグロセキレイ
4	ゴイサギ	カルガモ
5	ホオジロ	キセキレイ

※H6、H13の2ヶ年とも上位に確認された種：■

魚類相の変化

確認個体の多い種はオイカワ、ウグイ、カワムツなどのコイ科の魚類となっており、その傾向は大きく変化していない。

※魚類の行動が活発になる夏季～秋季の結果を比較

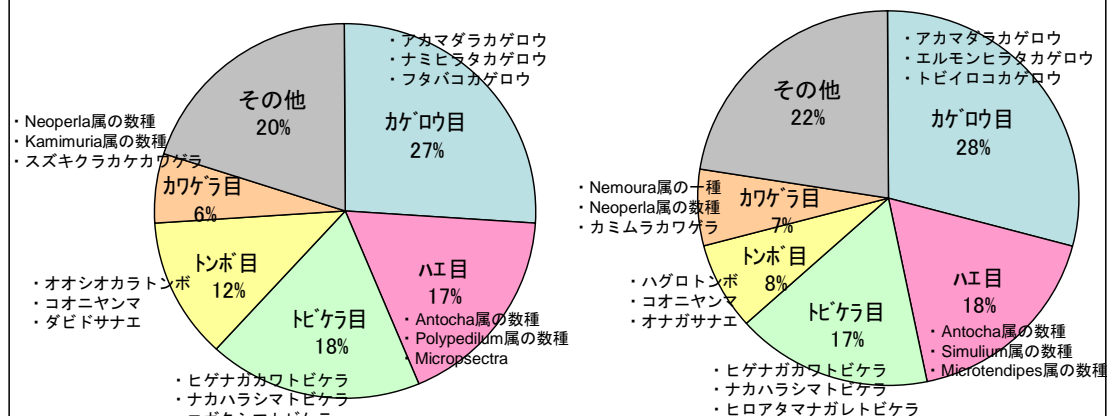
	川辺川（調査地点：1.5～1.9k）		
	H6年8月	H10年10月	H16年9月
1	ウグイ	オイカワ	オイカワ
2	オイカワ	カワムツ	ウグイ
3	カマツカ	ウグイ	カワムツ
4	カワムツ	カマツカ	タカハヤ
5	タカハヤ	ドンコ	ドンコ

※H6, H11, H16の3ヶ年とも上位に確認された種：■
 ※H6, H11, H16のうち2ヶ年で上位に確認された種：■
 ※青字：汽水・海水魚、赤字：回遊魚、黒字：淡水魚

底生動物の変化

カゲロウ目、ハエ目、トビケラ目の種が多く確認されており、その傾向は大きく変化していない。

調査地点：1.9～2.1k



※底生動物は、出現する種が季節により大きく異なるため、通年での結果を比較

植物群落及び生物の確認種に大きな変化はなく、川辺川の典型的な環境に大きな変化は見られない。